Voice が溢れる英語教育を

中嶋塾 2023＠東京　卒塾生
山内　崇史（麻布中学校・高等学校）

1.　背景として　～「表現者としてのアイデンティティ」とは　～

AI 時代において外国語学習の意義が（一般的には）薄れています。その中で、英語教師として、どのような学びを子どもたちに残してあげられるか、どのような方向で授業をすればいいのかと考えたとき、まず思ったのは「表現したい、誰かに分かってもらいたいという気持ち（感情）は、AI には代えられない」ということです。自分の思いを、自分のことばで紡ぎ、誰かに伝えること ― そこにこそ、ことばを扱う授業の意味があるように思います。タイトルを「voice が溢れる英語教育を」とさせていただいたのは、それが理由です。

Q.　なぜ voice を大事にしたいと思うのか？
A.　一人ひとりの voice は「**表現者としてのアイデンティティ**」だからです。

「**表現者としてのアイデンティティ**」には、2つの要素があると考えます。

①　自分らしい表現のリズム、呼吸（one’s own way of expression）

②　自分にしか表現できないもの（one’s own ideas, views）

これは中学生や高校生にとって難しいかもしれません。①②両方の要素を極めると、小説家、映画監督、絵描き、音楽家、陶芸家などなど「表現者」の仲間入りということになってしまいます。でも、ことばを学ぶ者にとってそのような「こだわり」（自分のアイデンティティ）は不可欠です。特に、探究活動では「このテーマなら負けたくない」というような極みを目指すことで、その域に近づいていけます。

「文は人なり」と言います。自分という人間が映し出される、あるいは自分なりの世界観が投影される。そのような文章を綴り、語り合う授業を目指すこと、それが私たち、ことばを教える教師の矜持であろうと思います。AI の時代になり、Google 翻訳、DeepL、ChatGPT などが登場しました。残念ながら、それらにレポートや英作文の代筆をさせる生徒もいます。これでは自己アイデンティティの喪失です。ことばの教師として、一人ひとりの学習者が「**表現者としてのアイデンティティ**」をもち、最後まで内容やことば（表現）にこだわるような授業を展開すること、それこそが私たち教師の「アイデンティティ」ではないでしょうか。大修館書店『英語教育』10 月号（2024）の原稿で「自分のことばで語れるように」と書いていたのは、そのような意味がありました。

2.　“voice” の定義

そのようなことを常々思っていたところ、『「書く力」の発達　第二言語習得論と第二言語ライティング論の融合に向けて』（保田幸子著、くろしお出版、2024）で voice という観点があることを知りました。保田（2024）によると、voice とは「書き手が文章を通して読み手に伝えたいこと，あるいは，書き手としてのアイデンティティと直結するもの」(p.169) ということです。ここで紹介されていた様々なルーブリックの中に Cecilia Guanfang Zhao による The Analytic Voice Rubric がありました。書き手の voice を評価するためのルーブリックです。このルーブリックには 3 つの側面があります。

◆ Dimension 1: エッセイの内容そのもの，内容の独自性と洗練性

◆ Dimension 2: 自身の主張に対する書き手の確信度の高さ，説得性

◆ Dimension 3: 書き手の存在，独自性の表現，読み手への働きかけ （p.169）

以下、そのルーブリックの最高評価の定義を抜粋します。（pp.170-171）

◆Dimension 1 (The ideational dimension) Voice evoked by the presence and clarity of ideas in the content • The reader feels a clear presence of a central idea (point of view) throughout the text. • The writing shows a strong commitment to the topic through full development of the central idea (point of view) with adequate use of effective examples and details. • The reader feels that he or she is being invited to participate in the discussion of the topic and the construction of an argument through the author's use of directives phrases when presenting ideas. • The idea (point of view) and the use of examples and details in the writing are unique, interesting, and engaging, indicating sophisticated thinking behind the writing.
◆Dimension 2 (The affective dimension) Voice evoked by the manner of presentation • The writer presents ideas and claims with language that shows authority and confidence. • The reader feels that the writer has a clear stance on and a strong attitude toward the topic under discussion. • The tone of the writing shows personality, adds life to the writing, and is engaging and appropriate for the intended reader. • Word choice, and language use by extension, is varied, often interesting, sophisticated, and eye-catching to the reader.
◆Dimension 3 (The presence dimension) Voice evoked by writer and reader presence • The writer reveals him- or herself in the writing either directly or indirectly, giving the reader a clear sense of who the writer is as a unique individual. • The reader feels that the writer is aware of and able to engage the reader effectively in a direct or subtle way. • The sharing of personal backgrounds and experiences, if any, is effective, genuine, and engaging to the reader.

（下線は筆者、特に「その人らしさ」を評価していると考えられる箇所に引いた）

3， “voice” と英語教育

第 1 節で、生徒が「①自分らしい表現のリズム、呼吸」と「②自分にしか表現できない何か」をもつ（もとうとする）ことを目指すのがよいのではないか、と述べました。前々から英語教育を「正確性」と「流暢性」の世界に閉じ込めていてはいけない…というところまでは考えていたわけですが、ではどうしたらいいか。

そこで voice です。「表現者としてのアイデンティティ」の 2 要素が、面白いほど voice の定義と重なります。さらに、読み手意識も含まれています。「これだ！」と思いました。しかも、voice を評価対象とする、という発想にも大いに納得しました。

先日、文集づくりに取り組む高 2 生向けに、Google Classroom で次のように発信しました。（一部抜粋）（現在高 2 では、テーマ自由で A4 版 1 ページの原稿を作成中）

文法・語法的に正しい英語を書くのは何のためですか？ 結束性を意識したり、探究コーラル・マップで構成を練ったりするのは何のためですか？ それは、伝えたいこと（content、idea）が明確に相手に伝わるようにするためです。伝えたいことが先にあってこそ、そこに「ことば」が乗っかるのです。では、あなたが伝えたいことは何ですか。

巷では、Content-based Language Teaching や Content and Language Integrated Learning などが有名ですが、それでは Content と Language が別個に存在しているような印象を受けます。また、高校で扱う content は、どうしても教科書で扱っている内容や社会問題などを想定しがちです。

しかし、私は Idea-driven Language Learning がいいと思っています。それは、他者の考えを知りたいとか自分の考えを伝えたいという思いに引っ張られるようにして、ことば（表現）の力がついてくる外国語学習です。これは Soft CLIL や Task-based にも近いスタンスですが、Idea-driven な授業では、内面の関わりにフォーカスが当たり、ヒューマニスティックな要素が増すように思います。

そのような授業では、ideaをもった人間（ユニークな視点を持ったユニークな個人）同士が向き合い、支え合い、高め合うようになります。表現者として個が屹立していながら、個々が響き合い、言語活動を通して idea（考えや気持ち）を交歓することで、さらにことば（表現）の質が昇華されていくようになります。

これを具現化する指導方法としては、今まで中嶋先生に教わってきた「生徒に委ねる」ことや「やり取りで紡ぐ授業」、そして「思考ツールを活かした学び」が最適です。授業のかなめになるのは、多様な考えを掘り起こすことです。そのためには、「引き算思考」で「起承転結」のある授業づくりをすることが効果大です。そして、「転」の場面で、「揺さぶり」をかけることです。昨年の新著『英語教師のための授業デザイン力を高める 3 つの力』（大修館書店）の 2 章 2-4 や 3 章 3-3 で学ばせて頂いた内容でもあります。

さらに同書第 1 章 1-1 は、教師向けに書かれた内容ですが、当然生徒の学びの在り方とパラレルです。P.13 の「3つの“-ize”」を援用すると、次のようなステップを踏むことで voice を育めるでしょう。

- ☐ Visualize：まずは母語で、自分の考えをもてるように導く
- ☐ Realize：「対話的な学び」（仲間や教師の視点を聞く、教科書とは異なる論点の資料を読む）の時間をしっかり取って気付きを促す
- ☐ Organize：マンダラートとマッピングで idea を広げたり整理したりする。そして、文章にして書く。

また扱うトピックとしては、たとえば My (Favorite) ○○ というような、生徒にとって身近なトピックで十分です。さらにアイデンティティを発揮できるようにする工夫としては、Our English Teacher のような「題材」ではなく、Mr. Yamada Uses Magic Wand in His Classes のような「題名」にすることが鍵になるのではないかと考えています。

試験の採点に当たっては、中嶋先生は「英語（語法）だけでなく、内容も加点すること」と繰り返し言っておられます。このときの「内容」は「理由と具体例がある」とか「豊かな文脈にするために discourse markers を用いている」というような形式的な側面に加えて、「その人らしさ」を加えるといいのかもしれません。日常の中から普遍的なものを感じ取る鋭い感性や視点の発露、自分で考えたメタファー、自分なりの具体例や体験など、国語の「現代文」で触れる一流の書き手たちのような「こだわり抜いた表現」が見られるか、といった観点です。

要は、「**あなたの声を聞かせて**」（Tell me more.）ということです。そのようにして生まれた「声」こそが、他者受容や傾聴の姿勢を育み、落ち着いた対話空間をつくる…ひいては学習者の主体性を引き出すのではないかと考えています。